手賀沼デジタル教材

手賀沼水生生物

(魚、エビ、貝、カメ、水生昆虫、水草など)

デジタル図鑑

手賀沼水生生物研究会編

©T.Momose

スタート

この図鑑にのせた生き物について

- 手賀沼水生生物研究会が2007年から確認してきた魚と水辺にすむその他の生き物の中から、手賀沼とその流域の川や水路などで**よく見られる水生生物**を図鑑にしました。
- 中心は魚ですが、ほかに甲殻類(エビやカニ)、爬虫類(カメ)、両生類(カエル)、貝類、水生昆虫(トンボヤゴなど)、水生植物を入れました。
- 5ページに魚の、6ページにその他の「よく見られる水生生物」の、五十音順の目次(さくいん)をのせました。 図鑑の各生物は五十音順に並んでいます。
- 7ページに魚の、8～9ページにその他の「よく見られる水生生物」の、生物分類別の目次(さくいん)をのせました。 4ページにこの図鑑の目次(さくいん)のまとめをのせています。どの目次(さくいん)を使うかはこのまとめのページ(4ページ)からえらべます。

まえへ つぎへ

この図鑑(ずかん)の使い方

- 目次(さくいん) (5～9ページ)の生物名(種名)をクリックすると、その生物のページに飛べます。
- それぞれの生物のページにある ◀ マークをクリックすると前ページに戻り、 ▶ マークをクリックすると後ろのページに進みます。
- それぞれの生物のページにある (50音順目次) 、 (生物分類順目次)マークをクリックすると、5～9ページの五十音順または生物分類別の元の目次に戻ります。
- マークをクリックすると4ページの『図鑑の目次まとめ』のページへ戻ります。
- おわり マークをクリックするとこの図鑑での検索(けんさく)がおわります。

図鑑の目次まとめ

さがしたい生物の目次をクリックしてえらんでください。

魚の名前をさがす　五十音順

その他の水生生物の名前をさがす　五十音順

魚の名前をさがす　生物分類別

その他の水生生物の名前をさがす　生物分類別

魚の名前をさがす　五十音順

魚の名前をクリックすると、その魚のページがでます。
各ページで左下にある マークをクリックすると、このページにもどります。

<ア行>
- アカヒレタビラ
- アシシロハゼ
- ウキゴリ
- ウグイ
- オイカワ
- オオクチバス
- オオタナゴ

<カ行>
- カダヤシ
- カムルチー
- カラドジョウ
- ギンブナ
- ゲンゴロウブナ
- コイ
- コウライギギ

<サ行>
- スゴモロコ
- スナヤツメ

<タ行>
- タイリクバラタナゴ
- タウナギ
- タナゴ
- タモロコ
- チャネルキャットフィッシュ
- ツチフキ
- トウヨシノボリ
- ドジョウ

<ナ行>
- ナマズ
- ニゴイ
- ニホンウナギ
- ヌマチチブ

<ハ行>
- ハクレン
- ハス
- ブルーギル
- ホトケドジョウ
- ボラ

<マ行>
- ミナミメダカ
- モツゴ

<ヤ行>
- ヤリタナゴ
- ヨコシマドンコ

<ワ行>
- ワカサギ
- ワタカ

その他の水生生物の名前をさがす　五十音順

生物の名前をクリックすると、その生物のページがでます。
各ページで左下にある マークをクリックすると、このページにもどります。

<ア行>
- アメリカザリガニ
- ウシガエル
- オオバナミズキンバイ

<カ行>
- カミツキガメ
- カラスガイ
- カワヒバリガイ
- クサガメ
- コオイムシ

<サ行>
- サワガニ
- シジミ類
- シナヌマエビ
- スジエビ

<タ行>
- タテボシガイ(イシガイ)
- タニシ類
- テナガエビ

<ナ行>
- ナガエツルノゲイトウ
- ニホンイシガメ
- ニホンスッポン
- ヌマガイ(ドブガイ)
- ヌマガエル

<ハ行>
- ヒメガマ

<マ行>
- マコモ
- ミシシッピアカミミガメ
- ミズカマキリ
- モクズガニ

<ヤ行>
- ヤゴ(イトトンボ類)
- ヤゴ(トンボ類)
- ヤゴ(ヤンマ類)
- ヨシ

魚の名前をさがす　生物分類別

魚の名前をクリックすると、その魚のページがでます。
各ページで左下にある マークをクリックすると、このページにもどります。

コイ科	アカヒレタビラ		ハクレン	サンフィッシュ科	オオクチバス
	ウグイ		ハス		ブルーギル
	オイカワ		モツゴ	ヤツメウナギ科	スナヤツメ
	オオタナゴ		ヤリタナゴ	ウナギ科	ニホンウナギ
	ギンブナ		ワカサギ	ギギ科	コウライギギ
	ゲンゴロウブナ		ワタカ	ナマズ科	ナマズ
	コイ	ハゼ科	アシシロハゼ	アメリカナマズ科	チャネルキャットフィッシュ
	スゴモロコ		ウキゴリ	ボラ科	ボラ
	タイリクバラタナゴ		トウヨシノボリ	カダヤシ科	カダヤシ
	タナゴ		ヌマチチブ	メダカ科	ミナミメダカ
	タモロコ	ドジョウ科	カラドジョウ	ドンコ科	ヨコシマドンコ
	ツチフキ		ドジョウ	タイワンドジョウ科	カムルチー
	ニゴイ		ホトケドジョウ	タウナギ科	タウナギ

その他の水生生物の名前をさがす　生物分類別①

生物の名前をクリックすると、その生物のページがでます。
各ページで左下にある マークをクリックすると、このページにもどります。

こうかく 甲殻類	エビ目	テナガエビ科	シナヌマエビ
			スジエビ
			テナガエビ
		サワガニ科	サワガニ
		イワガニ科	モクズガニ
		アメリカザリガニ科	アメリカザリガニ
はちゅう 爬虫類	カメ目	イシガメ科	クサガメ
			ニホンイシガメ
		スッポン科	ニホンスッポン
		カミツキガメ科	カミツキガメ
		ヌマガメ科	ミシシッピアカミミガメ
両生類	むび 無尾目	ヌマガエル科	ヌマガエル
		アカガエル科	ウシガエル

続きは次ページ(生物分類別②) へ

おわり

目次のまとめへ

まえへ　つぎへ

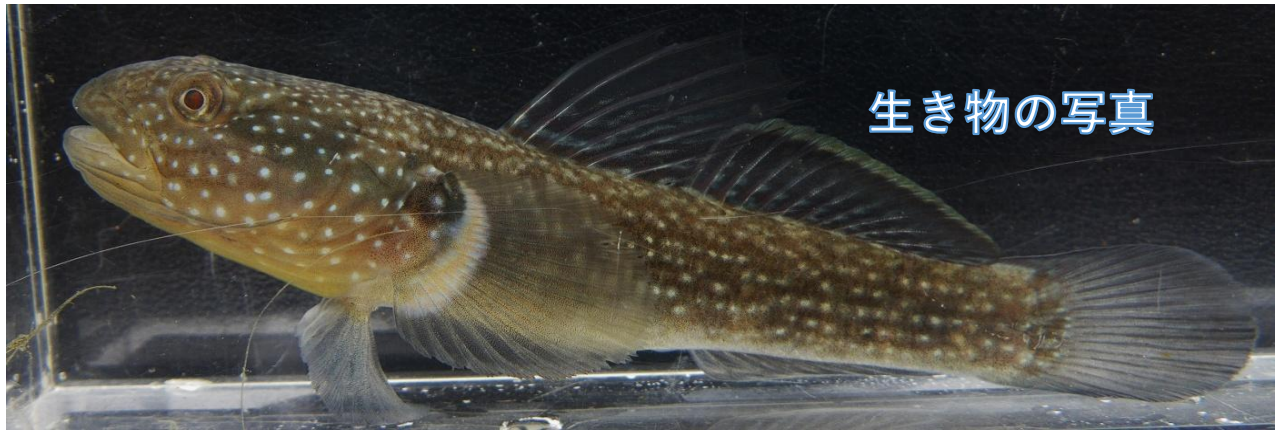
その他の水生生物の名前をさがす　生物分類別②

生き物の名前をクリックすると、その生き物のページがでます。
各ページで左下にある マークをクリックすると、このページにもどります。

貝類	二枚貝（二枚貝類）	イシガイ目	イシガイ科	カラスガイ
				タテボシガイ(イシガイ)
				ヌマガイ(ドブガイ)
		マルスダレガイ目	シジミ科	シジミ類
		イガイ目	イガイ科	カワヒバリガイ
	巻貝（腹足類）（まき　ふくそくるい）	原始紐舌目（げんしちゅうぜつもく）	タニシ科	タニシ類
昆虫類（こん）		カメムシ目	コオイムシ科	コオイムシ
			タイコウチ科	ミズカマキリ
		トンボ目	トンボ科など	トンボ類ヤゴ
			イトトンボ科	イトトンボ類ヤゴ
			ヤンマ科	ヤンマ類ヤゴ
水生植物		イネ目	イネ科	マコモ
				ヨシ
			ガマ科	ヒメガマ
		フトモモ目	アカバナ科	オオバナミズキンバイ
				ナガエツルノゲイトウ

この図鑑の見方

生き物の名前	科の名前	在来種か国外外来種か国内外来種か



(緑字)絶滅危惧種など、国や千葉県で守っている生き物

(赤字)特定外来生物など、外来生物法で駆除や侵入防止をしている生き物

【全長など】魚(水生生物)の大きさ

【体の形やつくり】形の特徴や見分けるための目印など

【すみかや食べもの】どこにすんでいるか、何を食べているかなど

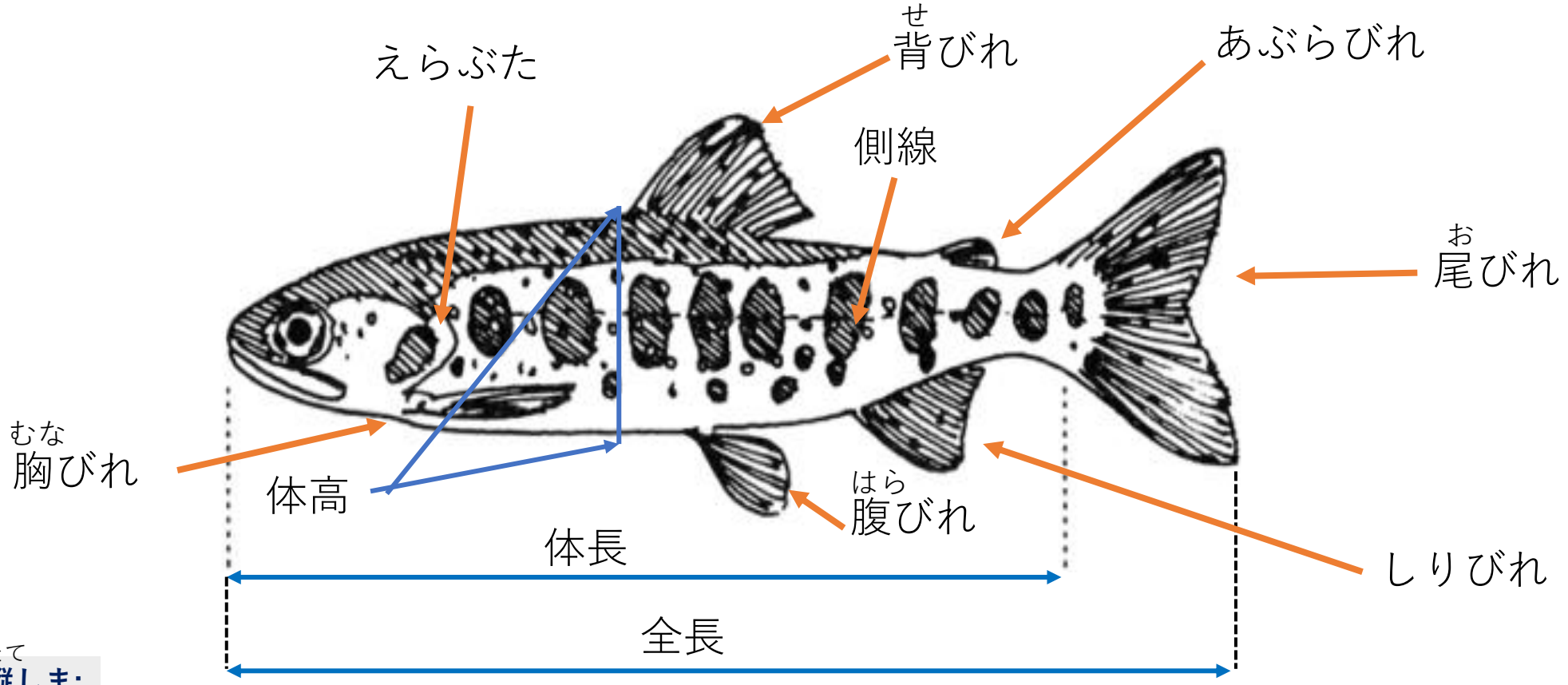
【繁殖行動など】繁殖期のふるまいや群れをつくるかどうかなど

【その他】そのほかのおもしろい点や、同じ類・目・科の生き物とちがっている点など

科：体の特徴が似ている生き物のグループのこと

魚の体のつくりや特徴を表すことは

科：体の特徴が似ている魚のグループのことです。



横しま・縦しま:

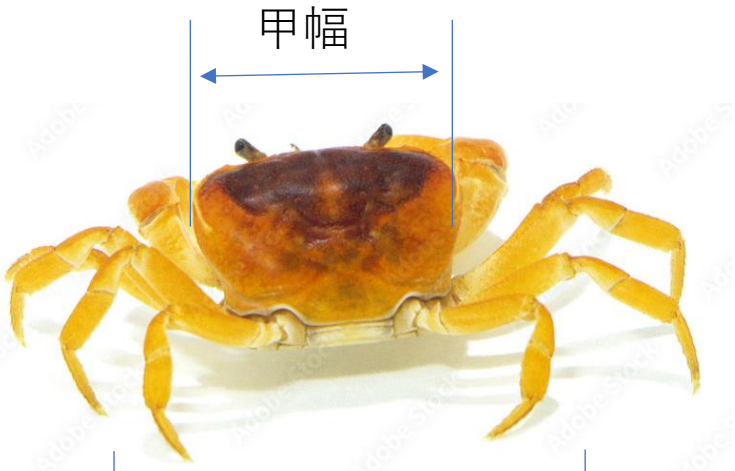
「魚のしま模様は、頭を上に尾を下に魚を立て、横(背中からおなかへ)のしまを「横しま」、縦(頭から尾へ)のしまを「縦しま」という」

水生生物の体のつくりや特徴(とくちょう)を表すことば

【甲殻類(こうかく)(エビ・カニの仲間)】

甲幅(こうふく)：カニの大きさを表す。甲羅(こうら)の幅(はば)で一番広いところ。

体長：エビなどの大きさを表す。頭のてっぺんから尾(お)の先までの長さ。

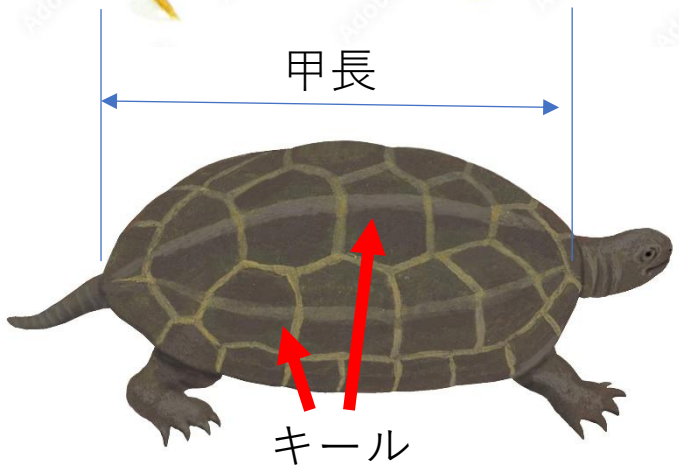


【爬虫類(はちゅう)(カメ・ヘビなど)、両生類(カエル・イモリなど)】

体長：頭のてっぺんから尾の先までの長さ。

甲長(こうちょう)：カメの大きさを表す。甲羅の一番前から一番うしろまでの長さ。

キール：カメの甲羅に出る1～3本のスジ状の盛(も)り上がり。



水生生物の体のつくりや特徴を表すことば

【貝類】

殻長と殻高：貝類は一番長いところで大きさを表す。

二枚貝(2枚の殻が合わさった形の貝)では、

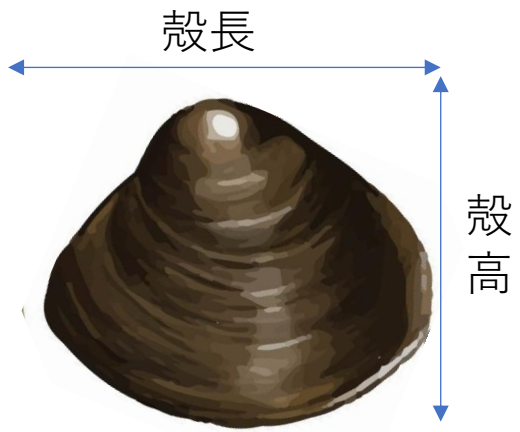
殻のくっついたところを上にして、横の幅を殻長、

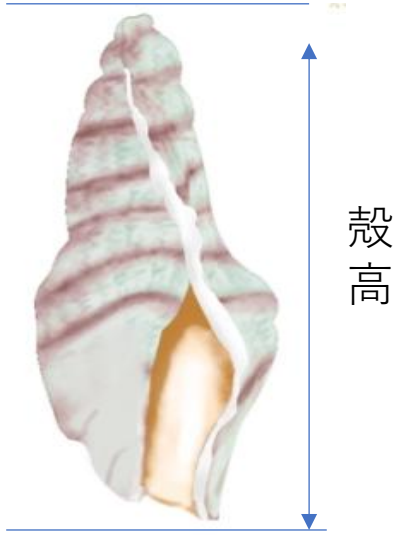
たての幅を殻高という。殻長で大きさを表すことが多い。

タニシのような形の巻貝では、とんがったてっぺんから、

一番下(入口のはし)までを殻高といい、

殻高で大きさを表すことが多い。





水生植物の種類

【水生植物】 水生植物には4つのタイプがある。

抽水植物（ちゅうすい）：根を水底に張っていて、体の一部が水面から出ているもの。

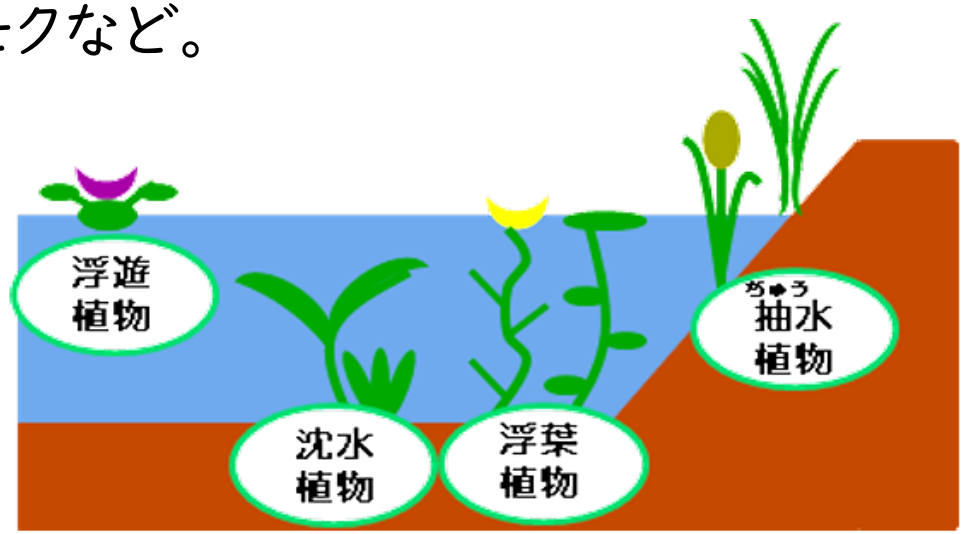
ヨシ、マコモ、ヒメガマなど。

浮葉植物（ふよう）：水面に葉を浮かせ、水底の地中に根があるもの。ヒシなど。

沈水植物（ちんすい）：体全体が水中に沈んでいるもの。ガシャモクなど。

浮遊植物（ふゆう）：根が底につかず、浮いているもの。

ウキクサ、ホテイアオイなど。



図/『手賀沼に暮らす生き物』(我孫子市発行)より

むずかしい言葉の説明① 在来種(ざい)など

在来種：むかしからその地域(いき)にすんでいる生き物(種)。

固有種：特定の地域だけにすむ生き物(種)。

絶滅危惧種(ぜつめつきぐしゅ)：数が少なくなり絶滅（死に絶(た)えてしまうこと）が心配されている生き物。

国や都道府県では、数が減(へ)り、守る必要のある生き物のリスト(レッドリスト)をつくり、その生き物を守っている。この図鑑(ずかん)には、千葉県のリストは最重要保護動物(A)と最重要保護動物(B)だけのせた。

国	千葉県
絶滅危惧ⅠA類(CR)	最重要保護(ほご)動物(A)
絶滅危惧ⅠB類(EN)	重要保護動物(B)
絶滅危惧Ⅱ類(VU)	要保護動物(C)
準絶滅危惧(じゅん)(NT)	一般保護動物(D)

千葉県生物多様性センターHPより一部記載

むずかしい言葉の説明②　外来種など

外来種：別な地域(ちいき)から移動してきたり、持ちこまれた生き物(種)。

国外外来種：外国から移動してきたり、持ちこまれた生き物(種)。

国内外来種：日本の別な地域から移動してきたり、持ちこまれた生き物(種)。

特定外来生物：国外外来種の中でも、今いる生き物に特に大きなえいきょうや被害(ひがい)を与えるため、「外来生物法」という法律(ほうりつ)で、外国から持ちこんだり、飼ったり、外に放つことが禁止(きんし)されている生き物。法律を破(やぶ)ると高いばっ金がつく(個人(こじん)で300万円、会社などだと1億円)。

例/ブラックバス、ウシガエル、ナガエツルノゲイトウなど。

条件付(じょうけん)き特定外来生物:つかまえて持ち帰ったり、飼ったりできるが、野外に放したり売ったりすることが禁止されている特定外来生物。2023年にアメリカザリガニとアカミミガメが指定された。

国際自然保護(ほご)連合(IUCN):1948年につくられた世界最大の自然保護団体。

160カ国以上から専門家などが参加。「侵略的(しんりゃくてき)外来種ワースト100」というリストを発表。

むずかしい言葉の説明③-1　生き物のすみかなど

原産：動物や植物が野生ではじめて発生した場所。

生態系（せいたいけい）：その地域（ちいき）にすむすべての生き物と、それをとりまく環境（かんきょう）(土、水、空気、日光など)が
おたがいに関わりながら、ひとつのまとまりとなっている状態。

淡水域（たんすいいき）：塩分がほとんどない水の水域。

汽水域（きすいいき）：川の河口部など、海水と淡水がまじりあった水域。

水域：海、川、湖など、水のある場所のこと。

流域：降（ふ）った雨や雪が地面を流れて集まるまでの場所全体をさす。

氾濫原（はんらんげん）：河川の水が洪水（こうずい）のときにあふれて広がる低い場所。 生き物が多く生息する。

ワンド：川の本流とつながっているが、石積みなどに囲まれ、池や入り江（え）のようになった場所。

むずかしい言葉の説明③-2　生き物のふえ方など

はんしょく
繁殖： 動物や植物が子どもをつくって仲間をふやすこと。

さんらん　　たまご　う
産卵：生き物が卵を産むこと。

ふ化：卵からかえること。

成魚：成長して大人になり、繁殖できる魚。

しぎょ
仔魚：卵からかえったばかりの魚の赤ちゃん。

ちぎょ　　じょう　　だんかい
稚魚：仔魚が成長し、ひれのトゲ(条)の数が成魚と同じになった段階。

ようせい
幼生(幼魚、幼虫など)：卵からかえってから成体(大人)になるまでの間の状態。

らんたいせい
卵胎生：母親の体の中で卵がかえり、子(幼生)の形で産まれる繁殖のしかた。

こうざつ　いでんてき　　ざっしゅ
交雑：遺伝的にちがう種類のオスとメスで、雑種(ハイブリッド)をつくること。

むずかしい言葉の説明③-3　その他

コロニー：繁殖期(はんしょくき)に同じ種の生き物がたくさん集まり、集団で卵(たまご)を産(う)み、育てる場所。

産卵床(さんらんしょう)：魚が卵を産みつける場所。砂やじゃりの湖底をほってつくるなどする。

婚姻色(こんいんしょく)：繁殖期の魚や鳥などに、一時的に出るあざやかな体色や模(も)様のこと。

追星(おいぼし)：主に繁殖期のコイ科の魚のオスの頭部や胸びれに出る白いブツブツ。

雑食性(ざっしょくせい)：動物も植物も食べる性質。動物だけ食べるのは動物食性、植物だけ食べるのは植物食性という。

底生動物：川や沼などの底の砂(すな)やどろ、岩の上などにいる小さな生き物のこと。貝類やカニ、エビ、水生昆虫(こんちゅう)の幼虫(ようちゅう)（カゲロウ、トビケラなど）など。

デトリタス：生き物の死がいやフン、食べ残しなどが分解(ぶんかい)されてできた、小さなつぶ。

手賀沼(てがぬま)の魚

アカヒレタビラ

（コイ科）

在来種

国/絶滅危惧ⅠB類(EN)
千葉県/最重要保護動物(A)

全長：6～10cm

【体の形やつくり】体の平たいタナゴ類の仲間の中では細長い。繁殖期のオスは婚姻色が出て、背びれやしりびれのへりが赤くなる。

【すみかや食べもの】手賀沼や河川の流れのゆるいところに生息する。藻や底生動物を食べる雑食性。

【その他】もともと手賀沼周辺には多くいたが、今はほとんど見られない。

【繁殖行動等】4～6月、タテボシガイ(イシガイ)などの中に卵を産む。卵は40時間くらいでふ化し、稚魚は1ヵ月くらいで貝から出る。

アシシロハゼ

（ハゼ科）

在来種

全長：
8～10cm

【体の形やつくり】ハゼ科の中では頭やウロコが小さめ。尾びれにまだらの模様があり、オスメスとも成魚になると白い横しまが出る。

【すみかや食べもの】汽水域の魚だが、淡水域に生息していることもある。上流域までは上がらない。藻や底生動物を食べる雑食性。

【繁殖行動等】5～9月、汽水域の石や貝がらの下にオスが巣をつくり、メスが卵を産む。卵はオスによって守られる。

【その他】手賀沼水生生物研究会では2017年に手賀沼で確認したが、利根川水系には普通にいる魚なので、よく見てみよう。

ウキゴリ	（ハゼ科）	在来種

全長：８～15cm

【体の形やつくり】体は円筒形で頭が平べったい。前背びれ(第１背びれ)の後ろ側に黒い点がある。

【繁殖行動など】4～6月、石やゴミの下などに産卵する。オスが卵を守る。

【すみかや食べもの】ワンドや岸寄りの流れのゆるいところにすむ。動物食性で水生昆虫やエビ、魚の稚魚などを食べる

【その他】ウキブクロが大きく、流れの深さのまん中へんをユラユラ泳ぐことから名前がついたといわれる。

ウグイ

（コイ科）

在来種

全長：20～50cm

【体の形やつくり】体は細長いが厚(あつ)みがある。成魚は20～30cmで、50cmくらいになることもある。

【すみかや食べ物】手賀沼(てがぬま)や流入河川(かせん)にすむ。なんでも食べる雑食性(ざっしょくせい)。

【繁殖行動等(はんしょく)】4～5月、産卵(さんらん)のため大きな群れをつくり、浅瀬(あさせ)のじゃり底などで産卵する。オスは繁殖期、体の側面に沿(そ)って3本の赤いスジが出る。

【その他】「ハヤ」とも呼ばれる。日本の代表的な淡水魚(たんすいぎょ)といわれる。海に下って大きく育ち、春に川にもどり産卵するものもいる。

オイカワ

（コイ科）

在来種

全長：12～15cm

【体の形やつくり】体は平べったく細長い。体色は銀白色で、口が小さい。

【繁殖行動等】繁殖期は5～8月。繁殖期にオスはきれいな婚姻色になり、口先と目の上が赤くなる。しりびれが大きくなる。メスは卵を砂に埋める。

【すみかや食べもの】手賀沼や流入河川、水路などにすむ。やや流れのある川底の岸よりに多い。藻を中心とする雑食性。

【その他】「ヤマベ」とも呼ばれる。つり人に人気で、各地で専門のつり大会が開かれている。

オオクチバス

（サンフィッシュ科）

国外外来種

国/特定外来生物
国際自然保護連合(IUCN)
侵略的外来種ワースト100

全長：30～60cm

【体の形やつくり】成魚の全長が60cmを超えることもある。口がとても大きい。口先が長く「受け口」(下あごが上あごより前に出た形)。

【すみかや食べ物】手賀沼にも河川にもため池にもすむ。魚やエビを好むが、動物食性で何でも食べる。水鳥のヒナやネズミなどまで食べることもある。

【繁殖行動等】4～6月、浅瀬のじゃり底に巣をつくり産卵する。オスが卵も稚魚も守る。

【その他】ブラックバスとも呼ばれる。バスつりとともに全国に広がった。法律で飼うことも放すことも禁止されている。つったらリリースせず駆除しよう。

オオタナゴ

（コイ科）

国外外来種

全長：８～１８cm

国/特定外来生物

【繁殖行動等】4～8月、イケチョウガイなどの中に卵を産む。

【すみかや食べ物】手賀沼や河川の流れのゆるいところや水路に生息し、水底近くを群れで泳ぐ。主に藻を食べるが、水生動物も食べる雑食性。

【体の形やつくり】タナゴ類の中では最大。体高が大きく、体の側面に青い線が走る。幼魚は背びれに黒い斑点、成魚はエラの後方に青い斑点がある。

【その他】特定外来生物なので、つっても持ち帰りできない。飼うこともできない。つったら駆除したい。

カダヤシ

（カダヤシ科）

国外外来種

©Kawai

国/特定外来生物
国際自然保護連合(IUCN)/
侵略的外来種ワースト100

全長：3～5.5cm

【体の形やつくり】メダカに似ているが、尾びれが丸く、しりびれのつけ根のはばがせまい。

【すみかや食べ物】流れのあまりない水路や池などにすむ。雑食性だが、プランクトンやほかの魚の仔稚魚、落ちてきた昆虫などの動物を好む。

【その他】カの幼虫のボウフラを捕食させるため、日本各地に入れられたが、すみかが重なるミナミメダカが減少している。特定外来生物なので飼うことも運ぶことも法律で禁止されている。

[繁殖行動など]繁殖期は5～10月。卵はメスの体内でふ化し、仔魚になって出てくる(卵胎生)。メスは1回に300もの仔魚をかかえることもある。

カムルチー

（タイワンドジョウ科）

国外外来種

©Hagiwara

全長： 50～100cm

【体の形やつくり】50cmをこえる大型魚で、英語で「スネークヘッド」と呼ばれるヘビのような頭をしている。魚だがエラのほか口からも空気を取り込む。

【すみかや食べ物】浅い湖沼や水路など流れのない場所にすむ。肉食で魚やカエルなどを食べる。

【繁殖行動等】5～8月、口からふき出すアワで巣をつくり、オスとメスで卵や稚魚を守る。

【その他】「ライギョ」とも呼ばれる。手賀沼には1960年代には多くいたようだが、近年は減っている。とてもおいしいが、寄生虫がいるので生食は危険。

カラドジョウ

（ドジョウ科）

国外外来種

全長：10～30cm

【体の形やつくり】ドジョウに比べて体高が大きめで、尾（お）びれのつけ根が太い。ウロコもドジョウより大きく、口ひげも長い。口がややとがる。

【繁殖行動など】繁殖期は6～7月ころ。ドジョウと同じく、田植えのころ、田んぼに入り、産卵（さんらん）する。

【すみかや食べもの】ドジョウと同じく、流れのないどろ底にすむ。何でも食べる雑食性（ざっしょくせい）。

【その他】食用やつりエサ用に中国などから輸入（ゆにゅう）され、一部が放流されて広まった。在来（ざいらい）のドジョウが競争に負けて減（へ）ることが心配されている。

ギンブナ

（コイ科）

在来種

全長：15～40cm

【繁殖行動など】3～6月、田んぼやヨシ帯などで卵を産む.ほとんどがメスで、オスとメスで子どもを産むタイプと、メスだけでふえるタイプがある。

【体の形やつくり】体高が大きめで、尾びれのつけ根が太い。口がややとがる。

【すみかや食べもの】湖沼、河川、水路などに広くすむ。水のよごれやにごりに強く、手賀沼にも数多く生息している。雑食性で何でも食べる。

【その他】「マブナ」とも呼ばれ、手賀沼ではつり人に人気の魚。

ゲンゴロウブナ

（コイ科）

国内外来種

全長：20～50cm

【繁殖行動など】群れをつくることが多い。3～6月、ヨシやマコモなどの抽水植物などに産卵する。

【すみかや食べもの】手賀沼と河川の下流に生息する。植物プランクトンを主に食べる。

【体の形やつくり】フナの仲間では最も体高が大きく、最も大きく成長する。ギンブナなどにくらべ、尾びれのつけ根が細い。

【その他】ヘラブナとも呼ばれる。もともとびわ湖周辺にいた魚で、ヘラブナつりの流行で全国に広がった。ヘラブナつりは手賀沼でも人気のつり。

コイ　（コイ科）　国外外来種

©Hagiwara

国際自然保護連合(IUCN)
侵略的外来種ワースト100

全長：50～100cm

【体の形やつくり】体高が大きく、おなかのへりが外に張り出す。うろこの模様がはっきりしている。2対(4本)のひげがある。

【すみかや食べもの】手賀沼にも河川にも生息する。雑食性だが、水生昆虫や貝など底生動物を好む。

【繁殖行動など】4～7月ころ、岸辺のヨシの中などで、バシャバシャと音を立てて繁殖行動をする。

【その他】昔、中国から持ちこまれ、長く食用魚として大事にされたが、今は貝や藻を食べて環境をこわす外来種と考えられている。

コウライギギ

（ギギ科）

国外外来種

©手賀沼水生生物研究会

国/特定外来生物

全長：10～20cm

【体の形やつくり】ギギ科(ナマズの仲間)の魚で、黄色っぽい体に独特の模様がある。背びれと胸びれに毒のあるトゲがあり、刺されると痛む。

【繁殖行動など】繁殖期は5～7月と考えられている。

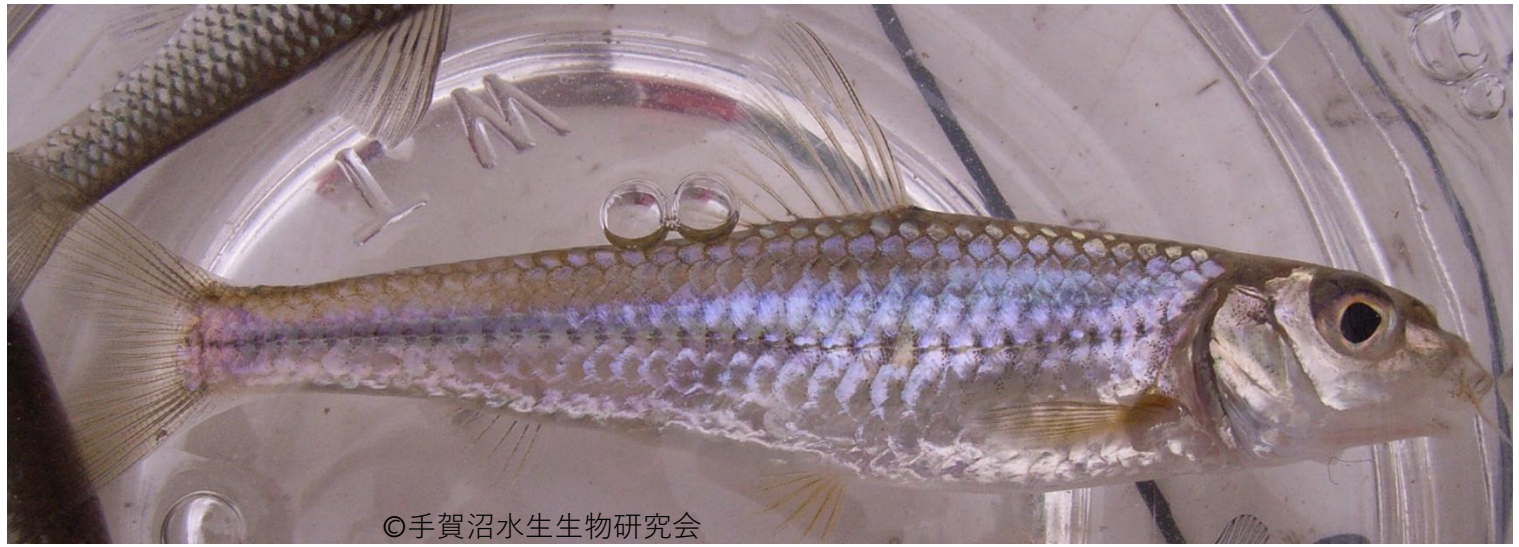
【すみかや食べもの】近年、手賀沼、周辺のため池、水路などで見られる。水生昆虫を食べる。

【その他】2008年に霞ヶ浦で確認され、2017年に手賀沼でも確認。中国や韓国から食用に輸入され広がったとされる。ケガ、漁業や生態系への被害などが心配され、特定外来生物に指定された。

スゴモロコ

（コイ科）

国内外来種



国/絶滅危惧Ⅱ類(VU)

全長：9～12cm

【体の形やつくり】体高が小さく細長い。口先がとがり、ヒゲが長い。背びれのすじ(条)が長く目立つ。

【すみかや食べもの】砂底やどろ底の上を群れで泳ぐ。水生昆虫、小型の巻貝などを食べる雑食性。

【繁殖行動など】繁殖期は5～6月ころ。生態がよくわかっていないが、メスは卵を水底にばらまくように産むと考えられている。

【その他】もともとはびわ湖の魚。他の魚の放流に混ざって、手賀沼に入ったと考えられるが、数は少ない。あっさりしたおいしい魚として知られている。

スナヤツメ　（ヤツメウナギ科）　在来種

©手賀沼水生生物研究会

国/絶滅危惧Ⅱ類(VU)
千葉県/最重要保護生物(A)

全長：15～25cm

【体の形やつくり】一生ウナギ形の体形で、そのほとんどを幼生期(子ども)で過ごす。幼生期には眼がない。成魚の口は吸盤になっていて、石に吸いつき、流されないように体を固定する。

【すみかや食べもの】主に河川の流れのゆるやかな場所のどろにもぐって過ごし、どろの中の**デトリタス**を食べる。成魚になると眼が現れ、エサをまったく食べなくなり、繁殖が終わると死ぬ。

(注)デトリタス：生き物の死がいやフン、食べ残しなどが分解されてできた、小さなつぶ。

【繁殖行動など】3～5月ころに成魚になり、メスの体にオスが巻きつき、メスが卵をばらまく。

【その他】体のつくりが原始的で、「生きた化石」とも言われる。手賀沼流域でもまだ見られる。

タイリクバラタナゴ

（コイ科）

国外外来種

©Momose

全長：4～8cm

【体の形やつくり】体高が大きく、平たい。繁殖期にオスはあざやかな婚姻色になり、メスのおなかからは長い産卵管（卵をうむための管）がのびる。

【すみかや食べもの】沼や川の流れのゆるいところに生息する。藻や底生動物を食べる雑食性。

【繁殖行動など】3～9月、メスは二枚貝の中に卵をうむ。卵は貝の中でかえり、稚魚は20日くらいで貝から出る。

【その他】中国から関東地方に入り、全国に広がった。手賀沼で最も多いタナゴ類。繁殖期が長く、メスの産卵管も長いため、在来種のタナゴ類が負けてしまうと心配されている。

タウナギ

（タウナギ科）

国外外来種

全長：30～90cm

【すみかや食べもの】ため池や湿地（しっち）、田んぼなどで、土に巣穴（すあな）をほったり、石がきのすき間にひそんだりしている。動物食性でミミズや昆虫（こんちゅう）などを食べる。

【繁殖行動（はんしょく）など】6～7月の繁殖期（はんしょくき）にメスからオスに変わる。口からふき出すアワで巣をつくり、口の中で子育てをする。

【体の形やつくり】ウロコやウキブクロがない、胸（むな）びれと腹びれがない、背（せ）びれとしりびれがつながっている、体の表面が粘液（ねんえき）におおわれているなど、特殊化（とくしゅか）の進んだ魚。空気呼吸（こきゅう）を行う。

【その他】もともとは熱帯から亜熱帯（あねったい）にかけて生息する淡水魚（たんすいぎょ）。料理の材料で輸入（ゆにゅう）され広がったと言われる。「リュウキュウタウナギ」は沖縄の在来種。

タナゴ　（コイ科）　在来種

©Kumagai

全長：6～13cm

国/絶滅危惧ⅠB類(EN)
千葉県/最重要保護動物(A)

【繁殖行動など】4～6月、タテボシガイなどの中に卵を産む。卵は50時間くらいでふ化し、稚魚は1ヵ月くらいで貝から出る。

【すみかや食べもの】河川中・下流域や湖沼、水路などに生息する。藻や底生動物を食べる雑食性。

【体の形やつくり】日本のタナゴ類の中では最も体高が小さく、細長い。短いロヒゲがある。背びれの上はしが黒い。

【その他】日本固有種で、最も絶滅が心配されているタナゴ類のひとつ。手賀沼にはほとんどいない。亜科名※と種名が同じで、「マタナゴ」とも呼ばれる。

※亜科:ひとつの科が大きすぎるため、より細かく分類するとき使われるカテゴリーのこと。

タモロコ

（コイ科）

国内外来種

©手賀沼水生生物研究会

全長：5～9cm

【体の形やつくり】モツゴによく似ているが、口が丸みを帯びていて、1対のやや長いヒゲがあることで見分けられる。

【繁殖行動など】繁殖期は4～7月で、水草や植物の根に卵を産みつける。

【すみかや食べもの】河川の中・下流域、湖沼、ため池など、流れのゆるやかな場所にすむ。名前のとおり水田地帯の水路に多い。雑食性。

【その他】モツゴより口が大きくつりやすい。
つかまえやすく飼いやすく、食べてもおいしい魚で、雑魚としてつくだ煮の材料にもされてきた。

チャネルキャットフィッシュ

（アメリカナマズ科）

国外外来種

©Hagiwara

国/特定外来生物

全長：60～130cm

【体の形やつくり】通常でも60～70cmになる巨大な魚。頭が平たく、ヒゲが4対8本ある。背(せ)びれと胸(むな)びれにするどいトゲがある。

【すみかや食べもの】河川(かせん)中・下流域(いきこしょう)や湖沼にすむ。動物食性。食欲(しょくよく)が強く、何でも食べる。

【繁殖(はんしょく)行動など】5～7月、水底にくぼみ(産卵床(さんらんしょう))をほって産卵し、オスが卵(たまご)と仔魚(し)を守る。

【その他】北アメリカ原産で別名「アメリカナマズ」。利根川(とねがわ)流域でふやす試験(しけん)をおこなったとき、一部が野外に定着したと言われ、手賀沼(てがぬま)でもふえている。

ツチフキ

（コイ科）

国内外来種

©手賀沼水生生物研究会

全長： 4～10cm

【体の形やつくり】オスがメスより大きい。オスの背びれと尾ひれには黒いはん点があり、背びれは繁殖期に大きくのびる。

【すみかや食べもの】河川下流域のワンドや水路などのどろ底にすむ。どろの中の底生動物や**デトリタス**を食べる。

(注)デトリタス：生き物の死がいやフン、食べ残しなどが分解されてできた、小さなつぶ。

【繁殖行動など】4～7月、オスがどろ底にすりばち状の穴をほり、メスに産卵させて卵を守る。

【その他】もとは西日本の魚だが、今日、びわ湖などで減っていて、利根川水域ではふえている。

トウヨシノボリ　（ハゼ科）　在来種

全長：4～8cm

【体の形やつくり】オスの尾のつけ根は繁殖期にオレンジ色になる。眼～鼻に赤い筋がある。同じハゼ科のヌマチチブに比べ、頭が小さくとがっている。

【繁殖行動など】5～6月ころ、しずんだ木や石の下に巣をつくって産卵し、卵がかえるまでオスが守る。

【すみかや食べもの】川の上流～下流、池沼など、日本全国のいろいろな水域にすむ。雑食性。

【その他】ヨシノボリの仲間は多様で、中でもトウヨシノボリの仲間は細かく分類されているため、「トウヨシノボリ」とまとめて呼ぶ。腹びれが吸盤のように変化

ドジョウ	（ドジョウ科）	在来種

全長： 10～30cm

【体の形やつくり】体が細長く、5対10本のヒゲがある。オスは胸（むな）びれが大きくしっかりしている。エラだけでなく腸（ちょう）や皮ふでも呼吸（こきゅう）できるため、水中の低酸素（ていさんそ）に強い。

【繁殖（はんしょく）行動など】5～8月、田んぼに水が入ると田んぼに上がって育ち、産卵（さんらん）する。手賀沼（てがぬま）で減（へ）ったのは、水田とのつながりが減ったためとも言われる。

【すみかや食べもの】田んぼや水路、湿地帯（しっちたい）など、流れのない場所のどろ底にすむ。雑食性（ざっしょくせい）。

【その他】日本全国にいて、昔から食用として人気がある。そのため輸入（ゆにゅう）されたものが野外で広がり、今は日本原産かどうかわからないことが多い。

ナマズ　（ナマズ科）　在来種

国/絶滅危惧ⅠB類(EN)
千葉県/最重要保護動物(A)

全長：50～70cm

【体の形やつくり】体の表面にウロコがなく、粘液でヌルヌルする。口は受け口で横に広い。口ひげが上下2本ずつ、計4本ある。しりびれのつけ根が長く、背びれのつけ根が短いのが特徴。

【繁殖行動など】初夏に田んぼや氾濫原など、一時的にできる水域に入り、産卵する。

【すみかや食べもの】湖沼、水路、河川下流域のワンドなどにすむ。夜行性。動物食性で魚やカエルなどを食べる。

【その他】ナマズが地震を起こすという伝説があるなど、日本の文化にも関わりの深い魚。食用としても大事にされてきた。

ニゴイ

（コイ科）

在来種

全長：30～50cm

【体の形やつくり】コイに似ていて名前がついたとされるが、体は細長く、口先がつき出、ヒゲの数は1対2本(コイは2対4本)などで見分けられる。

【すみかや食べもの】川の中・下流域や湖沼(こしょう)の底近くにすむ。稚魚(ちぎょ)は水路にも入り、のちに川や湖にもどる。底生動物食だが小型魚類も食べる。

【繁殖行動(はんしょく)など】4～7月、メスを数匹のオスが追いかけ、メスは砂やじゃりの水底に卵(たまご)をばらまく。オスは体が黒くなり、口のまわりなどに追星(おいぼし)が出る。

【その他】日本固有種。コイと同じく水のよごれに強く、手賀沼(てがぬま)でもよく見られる。

ニホンウナギ

（ウナギ科）

在来種

全長：50～100cm

国/絶滅危惧ⅠB類(EN)
IUCN/絶滅危惧ⅠB類(EN)

【繁殖行動など】マリアナ近海で産卵し、ふ化後、シラスウナギとなって日本に泳ぎ着き、河川を上る。

【すみかや食べもの】日本の多くの湖沼河川で5～10年生活し、秋にマリアナ近海に向けて移動する。動物食性で魚やエビなどを食べる。

【体の形やつくり】棒のような形をしている(ウナギ形という)。腹びれがなく、背びれと尾びれとしりびれがつながっている。

【その他】1950年代までは手賀沼にも多く生息した。昔は「手賀沼のアオ」として有名だった。生息数が激減し、2013年に絶滅危惧種に指定された。

ヌマチチブ

（ハゼ科）

在来種

全長：6～13cm

©手賀沼水生生物研究会

【体の形やつくり】同じハゼ科のヨシノボリ類に比べ、頭が大きくずんぐりしている。胸（むな）びれのつけ根にオレンジの線がある。オスは背（せ）びれが長くのびる。

【すみかや食べもの】河川（かせん）中・下流域（いきいき）や湖沼（こしょう）の流れのゆるいところや浅瀬（あさせ）にすむ。雑食性（ざっしょくせい）で、主に藻（も）などを食べる。

【繁殖（はんしょく）行動など】春～夏、石の下などにオスがつくった巣にメスが産卵（さんらん）し、オスが卵（たまご）を守る。

【その他】気があらく、なわばりをつくるので、飼育（しいく）するときは注意が必要。

ハクレン

（コイ科）

国外外来種

全長： 50～100cm

【すみかや食べもの】大きな河川（かせん）にすむ。利根川（とねがわ）水系（けい）にすみつき、最近は手賀沼（てがぬま）でも増えている。植物プランクトンを食べる。

【繁殖（はんしょく）行動など】6～7月、雨のあとの増水（ぞうすい）時に産卵（さんらん）する。生後5～7年で成魚になる。

【体の形やつくり】体高が大きく平べったい。銀白色。腹（はら）の下のへりが刃（は）のように出っ張（ぱ）る。眼（め）が顔の下のほうにある。

【その他】中国原産で食用として日本に入った。最近は手賀沼でもジャンプする姿が見られる。

ハス　（コイ科）　国内外来種

©手賀沼水生生物研究会

全長：20～30cm

【体の形やつくり】オイカワに似ているが、より大型になる。眼が上のほうにあり、ほほが広い。口はへの字をしている。

【すみかや食べもの】泳ぎは速いが、流れのない水面近くを泳いでいることが多い。日本のコイ科ではめずらしく魚食性。

【繁殖行動など】繁殖期は5～8月。沼岸や流入河川のじゃり底で卵を産む。

【その他】もともとはびわ湖・淀川水系と三方湖(福井県)だけにいたのが、各地に広がった。

ブルーギル

（サンフィッシュ科）

国外外来種

全長：10～25cm

国/特定外来生物
こくさいしぜんほごれんごう
国際自然保護連合(IUCN)
しんりゃくてき
侵略的外来種ワースト100

【体の形やつくり】平べったく体高が大きく、横から見ると円(まる)い形をしている。背(せ)びれにトゲがある。

【すみかや食べもの】河川下流域(いきこしょう)や湖沼の流れのない場所にすむ。雑食性(ざっしょくせい)で何でもさかんに食べる。

【繁殖(はんしょく)行動など】繁殖期が5～9月と長く、いくつかのペアがコロニーをつくって産卵(さんらん)する。オスが卵(たまご)と仔稚魚(しちぎょ)を守る。

【その他】1960年に日本に持ちこまれ、手賀沼(てがぬま)では1970年代に見られるようになった。生態系(せいたいけい)などへのえいきょうが、世界的に心配されている。

ホトケドジョウ

（ドジョウ科）

在来種

©手賀沼水生生物研究会

国/絶滅危惧ⅠB類(EN)

全長：4～8cm

【体の形やつくり】体が細長く、頭がやや平べったい尾びれの先が丸く、背びれは腹びれよりうしろにある。ひげは6本に加え、鼻から2本生えている。

【繁殖行動など】3～6月、水草や落ち葉などに卵を産みつける。稚魚は2cmまではうかび泳いでいる。

【すみかや食べもの】水温が低く、流れのゆるい、谷津田周辺の小さなみぞや湿地、田んぼなどにすむ。底生動物を中心とした雑食性。

【その他】日本固有種で、東北地方から兵庫県までの本州にすむ。手賀沼では今日も流入河川でごくまれに見られる。

ボラ

（ボラ科）

在来種

©Hagiwara

全長：35～60cm

【体の形やつくり】背(せ)びれが2つあり、胸(むな)びれが高い位置にある。幼魚(ようぎょ)は平べったいが、5cmをこえると体が円筒形(えんとうけい)になる。

【すみかや食べもの】海でふ化し、幼魚(ようぎょ)は群れで内湾(ないわん)の汽水域(きすいいき)や河川(かせん)に上る。秋まで育ち、また海に下る。**デトリタス**や小さな底生動物を食べる。

(注)デトリタス：生き物の死がいやフン、食べ残しなどが分解されてできた、小さなつぶ。

【繁殖行動など】繁殖期(10～1月)になると、外海や湾(わん)に泳いでいき、産卵(さんらん)する。

【その他】高くジャンプする姿(すがた)を手賀沼(てがぬま)でも見かける。「日本三大珍味(ちんみ)」のカラスミは「ボラ」の卵(たまご)でつくる。

ミナミメダカ

（メダカ科）

在来種

国/絶滅危惧Ⅱ類(VU)
千葉県/重要保護動物(B)

全長： 4～5cm

(注)2種とは ①ミナミメダカ と ②キタノメダカ の2種

【体の形やつくり】手賀沼の魚の中では小型。口は上を向いた「受け口」。国外外来種の「カダヤシ」は尾びれが丸いが、「メダカ」は角ばっている。

【すみかや食べもの】流れのゆるい河川や池沼、田んぼ、水路などの、水生植物が多い場所にすむ。水面近くを群れで泳ぐ。雑食性。

【繁殖行動など】繁殖期は4～8月で、この間、メスは卵を産み続ける。メスは卵を数時間腹にかかえたあと、水生植物などにつける。

【その他】日本固有種だが、水田環境の変化などで減り続けている。2011年にメダカが2種(注)に分けられ、手賀沼にいるのは「ミナミメダカ」。

モツゴ　（コイ科）　在来種

©手賀沼水生生物研究会

全長：4～8cm

【繁殖行動など】繁殖期(4～5月)、オスは全身が黒くなり、顔に追星が出る。卵は石や流木に産みつけられ、コイ科ではめずらしく、親(オス)が卵を守る。

【すみかや食べもの】河川の中・下流域や池沼、水路などにすむ。水のよごれに強く、どろのたまった水路などにもすめる。藻を中心とした雑食性。

【体の形やつくり】口は小さく「受け口」。ヒゲがない。口のはしから尾びれのつけ根までのびる黒い線のあるものが多い。

【その他】「クチボソ」とも呼ばれる。手賀沼の小魚の中ではもっとも数多くみられる魚。ほかの地域に入れられ、強い外来種として問題になることも多い。

ヤリタナゴ　（コイ科）　在来種

全長：6～13cm

国/絶滅危惧ⅠB類(EN)
千葉県/最重要保護動物(A)

【繁殖行動など】4～8月、ヨコハマシジラガイなどの中に卵を産む。繁殖期のオスは顔のまわりに赤みが出て、背びれとしりびれのはしが赤くなる。

【すみかや食べもの】河川中・下流域や湖沼、水路などに生息する。藻や底生動物を食べる雑食性。

【体の形やつくり】日本のタナゴ類の中では体高が小さく、細長い。1対2本の長いロヒゲがある。背びれのすじ(条)の間のまくに黒いはん点がある。

【その他】北海道をのぞく全国にいる。手賀沼では流入河川でときどき見られる。ただし、今日ではよその地域から持ちこまれたものがほとんどとされる。

ヨコシマドンコ

（ドンコ科）

国外外来種

©手賀沼水生生物研究会

全長：5～8cm

【体の形やつくり】ドンコ科の魚の中では小型（こがた）で、顔が丸い。名前の通り、体に7～8本の横しまがある。

【すみかや食べもの】湖沼（こしょう）や水路など、流れのゆるやかな場所にすむ。水生昆虫（こんちゅう）や藻（も）などの雑食性（ざっしょくせい）。

【繁殖（はんしょく）行動など】3～5月ころ、石の下に巣をつくって産卵（さんらん）し、卵（たまご）がかえるまでオスが守る。繁殖のとき、オスは体を左右にふるジグザグダンスをする。

【その他】関東では茨城（いばらき）県で最初に見つかり、広がりが心配されている。手賀沼（てがぬま）周辺では利根運河（とねうんが）に生息しているのを確認（かくにん）している。

ワカサギ

（キュウリウオ科）

在来種

全長： 10～20cm

【体の形やつくり】体は細長く、背びれが体のうしろのほうにある。背びれのうしろに、小さなあぶらびれがある。

【すみかや食べもの】湖沼、河川の下流域、湾岸まで広くすむ。ミジンコなど動物プランクトン食で、環境によりヨコエビ、ユスリカ幼虫なども食べる。

【繁殖行動など】繁殖期は冬から春にかけて。水草や枯れ木に産卵する。ふ化後、汽水域に下るもの、一生淡水で暮らすものなど、様々なタイプがいる。

【その他】アユと同じキュウリウオ科の魚。おいしく、つりも人気。手賀沼では昔、漁業に利用されていたが、今日ではほとんど見られない。

ワタカ

（コイ科）

国内外来種

全長：20～30cm

【体の形やつくり】体は細長く、平たい。側線(体の横の線)が下方向に曲がって尾(お)まで続く。鼻先がつき出ていて、口はやや上向き。ひげがない。

【すみかや食べもの】湖沼(こしょう)の岸よりや河川(かせん)のワンド、流れのほとんどない水路などによくいる。日本のコイ科にはめずらしく水草を好んで食べる。

【繁殖行動(はんしょく)など】6～8月、岸ぎわの植物帯に集まり、雨のあとの増水時(ぞうすいじ)、水草などに卵(たまご)を産(う)む。繁殖期のオスの頭部や胸(むな)びれには追星(おいぼし)が出る。

【その他】もともとはびわ湖や淀(よど)川の固有種。びわ湖のアユに混(ま)ざり全国に広がったといわれる。今日、びわ湖では数の減少(げんしょう)が心配されている。

手賀沼の水生生物

アメリカザリガニ

（甲殻類エビ目アメリカザリガニ科）

国外外来種

©手賀沼水生生物研究会

国/条件付特定外来生物

体長：10～12cm

【すみかや食べもの】全国の河川湖沼、ため池、水路などに広くすむ。雑食性で水草、魚、貝など何でも食べる。よごれに強く、陸上も何キロも移動する。

【体の形やつくり】脚は5対10本で、前の3対は先がハサミ型。一番前の1対は大きなハサミになる。尾は扇の形に広がる。額にある角(額角)がとがる。

【繁殖行動など】繁殖期は一年中で、メスが卵や仔をだいて守るため、繁殖力が強い。

【その他】日本に入って100年近くなるが、環境をひどくこわすことが最近になってわかり、2023年に条件付特定外来生物に指定された。飼うことはできるが野外に離すことは禁止されている。

ウシガエル

（両生類無尾目アカガエル科）

国外外来種

©手賀沼水生生物研究会

体長：12～18cm

国/特定外来生物
国際自然保護連合(IUCN)
侵略的外来種ワースト100

【体の形やつくり】大型のカエルで、水かきが発達している。目の後ろに見える丸い鼓膜(音を伝える器官)は、オスのほうが大きい。

【すみかや食べもの】流れのゆるやかな池や沼などにすむ。水の中にいることが多い。肉食で、口に入る大きさのものは何でも食べる。共食いもする。

【繁殖行動など】繁殖期は5～9月。1回の産卵で4万個もの卵を産むこともある。卵は水面にうく。

【その他】鳴き声が牛に似ているので名前がついた。1918年に食用でアメリカから持ち込まれたが、非常によく増え、生態系への影響が心配されている。

オオバナミズキンバイ

（フトモモ目アカバナ科）

国外外来種

©手賀沼水生生物研究会

国/特定外来生物

高さ：30～80cm

【形やつくり】水中では丸みのあるツヤツヤしたうき葉で、水面上や陸上では葉が細長くなる。葉はふちに細い毛が生え、くきに互（たが）いちがいにつく。

【手賀沼では】2017年に初めて確認（かくにん）されたが、すでに上流に広がっていた。手賀沼（てがぬま）ではナガエツルノゲイトウとまじりあった群落になっている。

【開花時期など】開花時期は6～10月ころ。直径4～5cmの黄色い花をつける。花びらは5枚（まい）。

【その他】繁殖（はんしょく）力が強く、タネでもふえ、葉やくきの切れはしからもふえる。船が通れなくなったり、田んぼでふえ、お米を減らすことが心配されている。

カミツキガメ

（爬虫類カメ目カミツキガメ科）

国外外来種

写真出典:環境省ホームページ　「外来種写真集」
https://www.env.go.jp/nature/intro/4document/asimg.html#tokutei

甲長：35～40cm

国/特定外来生物

【繁殖行動など】春から初夏に20～40個の卵を産む。卵はまれに100をこえることがある。

【すみかや食べもの】流れがゆるやかで、水草がしげり、底がどろや砂の場所を好む。雑食性だが、貝や魚だけでなく、ヘビや水鳥のひなまで食べる。

【体の形やつくり】甲羅は黒かっ色で3本のキール(たての出っぱり)があり、後ろのへりがギザギザになっている。スパイクのある長い尾をもつ。手足が引っこまない。

【その他】おこりっぽく、あごの力が強く、かまれると大けがする。印旛沼で増えて問題になったが、手賀沼でも増えている。見つけたら大人に知らせよう。

カラスガイ

（二枚貝類イシガイ目イシガイ科）

在来種

写真/栃木県内のカラスガイ

国/絶滅危惧ⅠB類(EN)

殻長(かくちょう)：20～40cm

【すみかや食べもの】河川(かせん)下流域(いき)や平地の水路など、流れがゆるやかで、水質(すいしつ)のいい砂(すな)やどろの底にすむ。水中のプランクトンなどを食べる。

【体の形やつくり】日本のイシガイ科の貝で最も大きい。「ヌマガイ」に似(に)ているが、からのつけ根にある長いかみ合わせ(後側歯(こうそくし))で見分けられる。

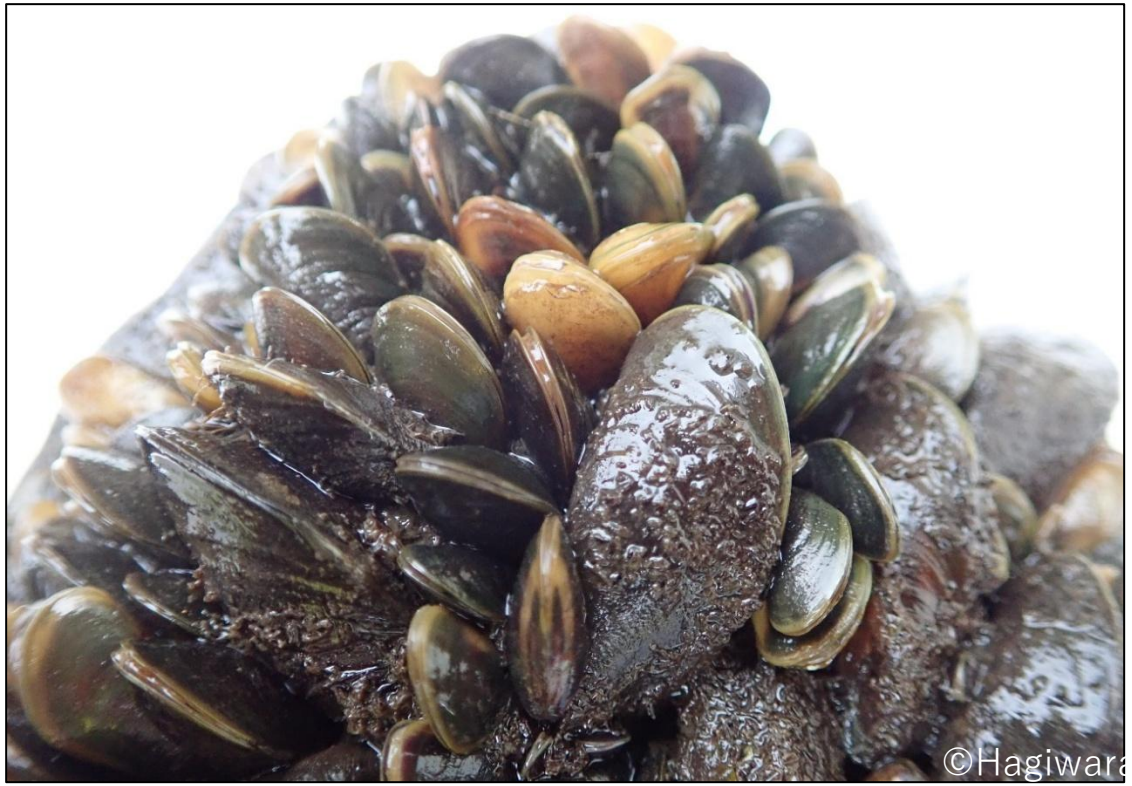
【繁殖行動など】3～7月、メスはえらに卵(たまご)をかかえ、卵はグロキディウムという幼生(ようせい)に育って出ていく。

【その他】「タンカイ(タンケ)」と呼ばれ、手賀沼(てがぬま)にも1960年代前半までたくさんいて、みそ煮(に)などで食べられていた。今は確認(かくにん)できず、殻(から)しか見つからないが、見つけたら大発見。

カワヒバリガイ

（二枚貝類イガイ目イガイ科）

国外外来種



かくちょう
殻長：2～4cm

国/特定外来生物

【体の形やつくり】小型（こがた）の二枚貝（にまい）で、からがうすい。足から出す糸で岩などにつき、そこで一生すごす。

【すみかや食べもの】水中の暗い場所を好む。水中の栄養分をエラでこしとって食べる。

【その他】1990年代に外国のシジミにまざって日本に入ったとされる。一か所に大量にくっつくため、排水（はいすい）パイプなどをつまらせてしまう。コイ科の魚の寄生虫（きせいちゅう）がいっしょに広がることも心配されている。

【繁殖（はんしょく）行動など】夏～秋、水温が21～27度くらいの時期に卵（たまご）を水の中に産む。卵から産まれた幼生（ようせい）は1～2週間、水中をただよい、岩などにくっつく。

クサガメ

（爬虫類カメ目イシガメ科）

国外外来種

甲長：20～30cm

【繁殖行動など】春の終わりから夏にかけて1～3回産卵する。1回に4～10個くらいの卵を産む。

【すみかや食べもの】泳ぎが得意でなく、流れのゆるやかな河川の下流域や沼などにすむ。水草、魚、水生昆虫、その死がいなど何でも食べる雑食性。

【体の形やつくり】甲羅に3本のキール(たての出っぱり)があり、後ろのへりはなめらか。オスはとしをとると黒くなり、メスは頭が大きくなることがある。

【その他】危険を感じるとくさいにおいを出すので、名前がついた。最近は江戸時代に入った外来種とされ、イシガメと交雑することが心配されている。

コオイムシ

（昆虫類カメムシ目コオイムシ科）

在来種

全長：2cm程度

国/準絶滅危惧(NT)

【繁殖行動など】4～8月、メスはオスの背中に30～40個の卵を産み、オスは卵がかえるまで世話をする。「子をせおう虫」と名前がついたのはそのため。

【すみかや食べもの】水田や水路など、浅くて流れのゆるやかな場所にすむ。肉食で、細い口でほかの昆虫や魚、オタマジャクシなどの体液を吸う。

【体の形やつくり】体は平べったく、えものをとるカマのような前あしをもつ。おしりに呼吸用の管がある。

【その他】かつては全国の水田や池などで見られたが、急に減っている。手賀沼周辺ではまだ見られる。

サワガニ

（甲殻類エビ目サワガニ科）

在来種

甲幅：2～3cm

【繁殖行動など】4～6月、メスは卵を少数(50個くらい)産み、約1か月おなかに持つ。カニの仲間ではめずらしく、産まれたときからカニの形をしている。

【すみかや食べもの】水のきれいな河川の上・中流域や湧水などにすむが、手賀沼周辺でもまだ見られる。雑食性で何でも食べる。

【体の形やつくり】甲羅はなめらかで、毛やとげなどがない。オスはおなかの幅がせまく、メスはおなかが円形で広い。赤、青、むらさきなど体色は多様。

【その他】本州から九州にすむ日本固有種。日本産のカニでただ1種、海と行き来せず、一生を淡水域で過ごす。

シジミ類

（二枚貝類マルスダレガイ目シジミ科）

在来種、国外外来種

殻長（かくちょう）：3～4cm

【体の形やつくり】三角形で厚（あつ）みがあり、コロッとしている。若（わか）い貝は黄緑色で、だんだん黒くなる。

【すみかや食べもの】河川や湖沼（こしょう）、水路などにすむ。どろの底は好まず、砂（すな）の多い底を好む。水中の栄養分をエラでこしとって食べる。

【繁殖（はんしょく）行動など】ひとつの体にオスとメス両方の働きがある。卵（たまご）は貝の中でかえり、幼生（ようせい）になって、5～8月ころ、貝から出てくる。

【その他】昔の手賀沼（てがぬま）や水路には「マシジミ」がいて、食用にもなっていた。今日、とれるのは外来種の「タイワンシジミ」だが、「マシジミ」と見分けはむずかしい。

シナヌマエビ

（甲殻類エビ目テナガエビ科）

国外外来種

©Hagiwara

体長：2～3cm

【体の形やつくり】「スジエビ」より体形がずんぐりしている。「スジエビ」の目は横に張り出しているが、「シナヌマエビ」は目が前に出ている。メスのほうが大きい。

【すみかや食べもの】流れのゆるい川や池など。水草の多いところを好む。雑食性。

【繁殖行動など】繁殖期は春～夏。メスは卵を50～100個産卵し、おなかにかかえて守る。

【その他】釣り人のエサとして韓国や中国から持ち込まれ、全国に広がった。手賀沼では2010年ころから水路で見られるようになり、今は多数生息。

スジエビ

（甲殻類エビ目テナガエビ科）

在来種

体長：3～5cm

【体の形やつくり】オスよりメスが大きい。体は透明で、カラに黒いスジが入る。目と目の間にあるツノ(額角)の上のふちは直線で、5～7本のトゲがある。

【すみかや食べもの】川や池などの淡水域に生息。藻や水草も食べるが、中心は肉食。小動物や動物の死がいなどを食べる。

【繁殖行動など】繁殖期は春～秋で、6～7月にさかんに卵を産む。メスは卵をおなかにかかえて守る。

【その他】ほぼ全国に生息する。手賀沼でも一番多くいるエビの仲間。

タテボシガイ(※イシガイ)

（二枚貝類イシガイ目イシガイ科）

在来種

殻長(かくちょう)：9cmくらい

【体の形やつくり】横に細長く、厚(あつ)みがある。若いときはウロコのような模様(もよう)があるものもいる。

【すみかや食べもの】流れのゆるやかな河川(かせん)や湖沼(こしょう)、水路などの砂(すな)やどろの底にすむ。水中の栄養分をエラでこしとって食べる。

【繁殖行動(はんしょく)など】繁殖期は春～夏。メスはエラの中で卵(たまご)をかえし、幼生(ようせい)が出てくる。幼生は「ヨシノボリ」やタナゴ類のヒレにくっつき、小さな貝になるまで育つ。

【その他】イシガイと分類されていたが、最近、東日本のものは「タテボシガイ」として分類された。昔は手賀沼(てがぬま)にもいたが、今は水路などにわずかに生息。

タニシ類

（腹足類原始紐舌目タニシ科）

在来種

マルタニシ殻長：5～6cm
オオタニシ殻長：6～8cm
ヒメタニシ殻長：2～3cm

【繁殖行動など】卵は体内でかえり、6～7月に幼生となって出てくる。

【すみかや食べもの】河川湖沼、水田、水路、湿地などにすむ。底にしずんだ**デトリタス**や藻を食べたり、水中の栄養分をエラでこしとって食べたりする。

(注)デトリタス：生き物の死がいやフン、食べ残しなどが分解されてできた、小さなつぶ。

【体の形やつくり】淡水にすむまき貝の仲間。カラの入り口にフタがある。触角の根元に目がある。

【その他】タニシ類は手賀沼と周辺で最も多く見られる貝の仲間だが、ほとんど調べられていない。

テナガエビ

（甲殻類エビ目テナガエビ科）

在来種

体長8～9cm

©手賀沼水生生物研究会

【体の形やつくり】淡水域では大型のエビ。2番目の脚が長く大きい。目と目の間にあるツノ(額角)の上のふちは丸く、10～14本のトゲがある

【すみかや食べもの】だいたいは水深のある沖にいて、梅雨のころ、産卵のため岸辺にやってくる。藻や水草も食べるが、中心は肉食。

【繁殖行動など】繁殖期は5～9月で、7～8月にさかんに卵を産む。メスはおなかに卵をかかえて守る。

【その他】本州から九州まで広く生息。からあげにするとおいしく、手賀沼では6月ころ、つりも行われる。

ナガエツルノゲイトウ

（フトモモ目アカバナ科）

国外外来種

©手賀沼水生生物研究会

国/特定外来生物

高さ：50～100cm

【形やつくり】くきがストローのような中空になっていて水にうき、くきの一部、ふしからも根が生える。陸上でもふえ、イネなどにまじって立ち上がる。

【手賀沼（てがぬま）では】2007年ころから手賀沼全体に広がった。2020年から千葉県による駆除（くじょ）が行われているが、手賀沼の水を引く田んぼでふえている。

【開花時期など】開花は4～10月ころだが、冬にさくこともある。花は直径1cmくらいで白い。

【その他】繁殖力（はんしょくりょく）が強く、地球で最悪の植物と言われる。水路や排水機場（はいすいきじょう）をつまらせることもある。

ニホンイシガメ

（爬虫類カメ目イシガメ科）

在来種

甲長：10～20cm

国/準絶滅危惧(NT)
千葉県/最重要保護生物(A)

【繁殖行動など】5～8月に1～3回、メスが地面に穴をほり、4～10個の卵を産む。卵がかえるのに2カ月かかる。

【すみかや食べもの】平野部にもいるが山間部などにもすむ。動物から植物まで何でも食べる雑食性。

【その他】日本固有種。千葉県では開発ですみかが減ったり水質が悪くなったり、アライグマに食べられたり、クサガメと交雑するなどして減っている。

【体の形やつくり】甲羅に1本のキール(たての出っぱり)があり、後ろのへりはギザギザ。尾が長い。

ニホンスッポン

（爬虫類カメ目スッポン科）

在来種

甲長：20～35cm

【繁殖行動など】6～8月ころ、メスは地面に穴をほり、10～40個の卵を産む。

【すみかや食べもの】流れのゆるやかな場所にすみ、ほとんどを水の中ですごす。昼間に行動し、日光浴を好む。肉食で魚、貝、カエルなど何でも食べる。

【体の形やつくり】甲羅は平べったく、やわらかい。鼻がとがり、首は長くのびる。

【その他】一度かみついたらかみなりが鳴るまで放さないと言われるくらい、かむ力が強い。日本では昔から栄養のあるおいしい食べ物として知られる。

ヌマガイ(※ドブガイ)

（二枚貝類科）

在来種

全長：10～20cm

【繁殖行動など】4～8月ころ、メスがエラの中で卵をかえし、幼生が出てくる。幼生はヨシノボリやタナゴ類のヒレにくっつき、小さな貝になるまで育つ。

【すみかや食べもの】流れのゆるやかな河川や湖沼、水路などの砂やどろの底にすむ。水中の栄養分をエラでこしとって食べる。。

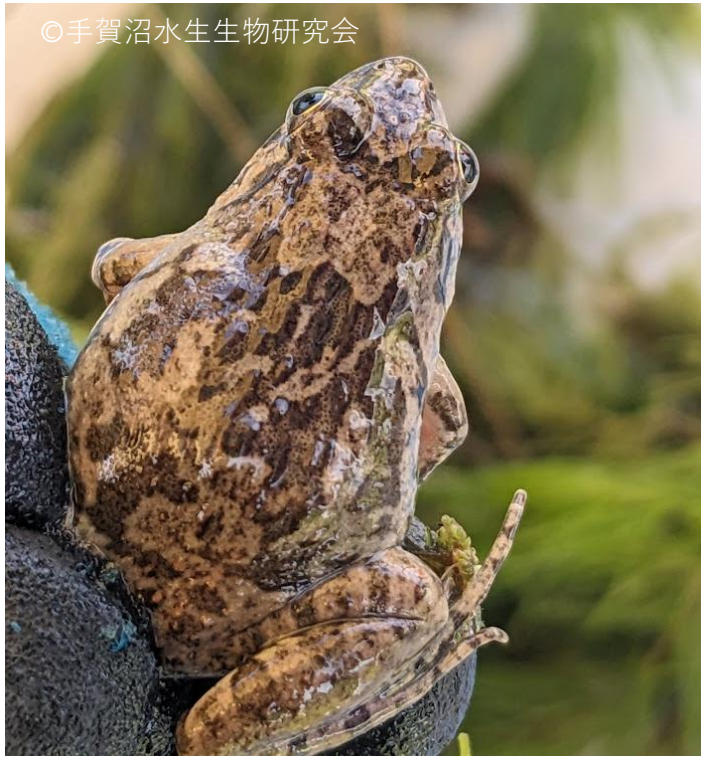
【体の形やつくり】大型の淡水二枚貝で、「カラスガイ」よりやや丸い。カラの表面に輪のような模様がある。

【その他】タナゴ類は「ヌマガイ」の中に卵を産む。ヌマガイ、ヨシノボリ、タナゴ類がすめる手賀沼を守ることが大切。今日、「ヌマガイ」が正式な分類名。

ヌマガエル

（両生類無尾目ヌマガエル科）

国内外来種



©Kawase

全長：3～6cm

【繁殖行動など】繁殖期（はんしょくき）は5～8月で、水田や浅い池などに卵（たまご）を小さなかたまりに分けて産（う）む。

【すみかや食べもの】平地の水田、湿地（しっち）、小川などにすむ。小さなエサが好きで、主に昆虫（こんちゅう）やクモ、アマガエルなどを食べる。共食いもする。

【体の形やつくり】手足が短くずんぐりした体形をしている。背中にイボイボがある。背中のまん中に白い線(背中線（はいちゅうせん）)をもつものもいる。おなかが白い。

【その他】千葉県で少なくなったツチガエルに似（に）ているが、もともとは西日本に多いカエル。近年、関東で増（ふ）え、手賀沼（てがぬま）でも急に増えて心配されている。

ヒメガマ

（イネ目ガマ科）

在来種

©手賀沼水生生物研究会

高さ：1～2m

【形やつくり】冬にかれても春にまた生（は）える多年草の抽水（ちゅうすい）植物。「め花」と「お花」の間にすきまがある。

【手賀沼（てがぬま）では】2023年ころから急に減（へ）った。原因（げんいん）がわからず、心配されている。

【開花時期など】8～10月ころ。ガマのほと呼（よ）ばれる部分が「め花（ばな）」で、先の棒（ぼう）のような部分が「お花（ばな）」。

【その他】神話「いなばの白うさぎ」で有名なガマの仲間で、花粉に血止めなどの効果があるとされる。

マコモ	（イネ目イネ科）	在来種

©手賀沼水生生物研究会

高さ：100～200cm

【形やつくり】沼から水田まで浅い水辺に広く生育する抽水植物。根を横にのばし、春にそこから芽を出してふえる。

【開花時期など】夏から秋にかけて50cmもの長い花をつける。1本に「お花（ばな）」と「め花（ばな）」を両方つける。

【手賀沼では】ヨシ、ヒメガマと並（てがぬま）（なら）んで、最もよく見られる水生植物だったが、急に減（へ）り、心配されている。

【その他】水生生物のすみかや産卵（さんらん）場所、水鳥の冬のエサ(根)などになる。菌（きん）に感染（かんせん）した茎（くき）「マコモダケ」は、最近、手賀沼周辺の農家でよくつくられる。

ミシシッピアカミミガメ

（爬虫類カメ目ヌマガメ科）

国外外来種

ミドリガメ(幼体)

写真出典：環境省
https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/regulation/jokentsuki.html

国/条件付特定外来生物
国際自然保護連合(IUCN)
侵略的外来種ワースト100

甲長：20～30cm

【すみかや食べもの】流れのゆるい河川湖沼に多いが、いろいろな場所にすむ。何でも食べる雑食性。

【体の形やつくり】甲羅はゆるやかなドーム型でキール(たての出っぱり)が1本あり、後ろのへりにゆるいギザギザがある。頭の両側に赤い模様が入る。

【繁殖行動など】繁殖期は春と秋。4～7月ころ、メスは地面に穴をほり、2～25個の卵を産む。

【その他】北アメリカ原産。幼体は緑色で「ミドリガメ」とも呼ばれる。手賀沼で最も多くみられるカメ。生き物への影響が心配され、2023年に条件付特定外来生物に指定された。30年くらい生きる。

ミズカマキリ

（昆虫類カメムシ目タイコウチ科）

国外外来種

全長：4～5cm

【繁殖行動など】5～7月ころ、メスは水辺のどろやコケなどの中に長い2本の呼吸管がついた細長い卵を数十個、いくつかに分けて産む。

【すみかや食べもの】池や沼、水路などにすむが、よく飛ぶため、いろいろな場所にいる。カマキリのような前あしで昆虫や魚などをつかまえ、体液を吸う。

【体の形やつくり】カマキリに似ているが、じつはカメムシの仲間。おしりに呼吸のための長い管(呼吸管)がある。カマのような前あしでえものをとる。

【その他】水のよごれに強く、手賀沼周辺でもよく見るが、最近は見られる回数が減っている。

モクズガニ

（甲殻類エビ目イワガニ科）

在来種

甲幅：4～5cm

【繁殖行動など】秋に川を下り、河口で産卵する。メスは卵をかかえて守る。5mmくらいの稚ガニになると川をさかのぼり、2～3年で成体になる。

【すみかや食べもの】河川や湖沼に生息する。夜行性で、昼間は石の下などにかくれている。

【体の形やつくり】六角形で頭の近くに3～4つのでっぱりがある。ハサミは左右同じ大きさで、藻のクズのような毛が生えている。

【その他】全国に生息し、各地で食用にされてきた。手賀沼では1955年頃までは多数生息していたが、今は少なくなっている。

ヤゴ(イトトンボ類)

（昆虫類トンボ目イトトンボ科）

在来種

全長：1～2cm

成虫

ヤゴ・成虫とも、
写真はアオモンイトトンボ

【繁殖行動など】成虫は主に初夏～夏、水面近くの植物のくきや葉に卵を産む。秋産卵の種類もある。ヤゴは水中で冬をこす。卵で冬をこす種もある。

【体の形やつくり】イトトンボ類は細い小型のトンボ。前後の羽が同じ形で、羽を閉じてとまる。ヤゴ(幼虫)も細く、尾のような3本の尾さい(エラ)を持つ。

【すみかや食べもの】成虫は水辺の草地にすむ。成虫はハエやカなどの昆虫、ヤゴはミジンコやボウフラ、メダカの稚魚などを食べる。動物食性。

【その他】手賀沼や周辺の池沼や湿地などに10種類以上生息している。

ヤゴ(トンボ類)

（昆虫類トンボ目トンボ科）

在来種

全長：1～3cm

ヤゴの写真/コサナエトンボ
成虫の写真/コフキトンボ

【繁殖行動など】繁殖期は主に春～初夏で、卵の産み方はさまざま(水面にばらまく、植物のくきに産みつけるなど)。多くは幼虫(ヤゴ)のまま冬をこす。

【体の形やつくり】平たくてずんぐりしている。砂やどろにもぐる。下あごがのびてエサをつかまえる。

【すみかや食べもの】河川湖沼、水田など、水のある場所やその周辺の草地、森林にすむ。動物食性。

【その他】手賀沼や周辺の水辺では、25種類以上のトンボ類が見られる。ヤゴは環境のいい悪いを示す生き物としても知られる。

ヤゴ(ヤンマ類)

(昆虫類トンボ目ヤンマ科)

在来種

全長:4～5cm

ヤゴの写真/ギンヤンマ©手賀沼水生生物研究会
成虫の写真/アオヤンマ©手賀沼水生生物研究会

【体の形やつくり】大型のトンボ、ヤンマ類は、ヤゴも大型。流線形(前が丸く、後ろがとがった形)の体や長い足ですばやく泳いだり移動して、狩りをする。

【繁殖行動など】主に夏から秋に産卵する。水草のくきなどに卵を産みつける。主にヤゴで冬をこす。

【すみかや食べもの】手賀沼周辺では河川や池沼、湿地など水辺に広くすむ。動物食性で、小魚や水生昆虫、オタマジャクシなどをたくさん食べる。

【その他】水生昆虫の中でも最強といわれ、「淡水のギャング」とも呼ばれる。手賀沼周辺にはギンヤンマ、アオヤンマなどが多い。

ヨシ	（イネ目イネ科）	在来種

©手賀沼水生生物研究会

全長：100～300cm

【開花時期など】開花は8～10月。くきの先から穂（ほ）が出て花がさく。実がなるとススキのように見える。

【手賀沼では】沼ぎわや川など、どこでも見られるが、近年、ヨシも減（へ）っていると思われる。

【形やつくり】沼や川の水ぎわに背（せ）の高い群落をつくる。葉はくきからたがいちがいに生える。　地中のくきは横にのび、節からひげ根を出してふえる。

【その他】ほかの植物がきらう成分を出すため、群落にはヨシしか生えないが、ヨシキリなどの鳥やどろの中の貝など、多くの生き物が利用している。

手賀沼デジタル教材

手賀沼水生生物デジタル図鑑

おわり

手賀沼水生生物研究会

教員の皆様へ

図鑑検索を終える際は奥付の注意事項を必ず確認ください。

目次のまとめへ（図鑑検索再開）

参考文献・奥付へ

©T.Momose

参考文献

- 細谷和海編・監修　『山渓ハンディ図鑑15 日本の淡水』(2015年改訂　山と渓谷社)
- 斉藤憲治『くらべてわかる淡水魚』(2015年　山と渓谷社)
- パンフレット『手賀沼に暮らす生き物』(2025年改訂　我孫子市)
- 『手賀沼の魚』(2019年改訂　手賀沼流域フォーラム実行委員会)
- 『手賀沼の生物図鑑』(手賀沼水生生物研究会HP)
- 『山渓ハンディ図鑑　日本のカメ・トカゲ・ヘビ第3版』(2025年　山と渓谷社)
- 関慎太郎『ポケット図鑑　田んぼの生き物400』(2012年　文一総合出版)
- 関慎太郎『野外観察のための両生類図鑑』(2016年　緑書房)
- 紀平肇、松田征也、内山りゅう　『日本産淡水貝類図鑑』(2003年　ピーシーズ)

手賀沼水生生物デジタル図鑑

制作・著作：手賀沼水生生物研究会
美手連デジタル教材PT
2026年4月公開

編集 半沢裕子(手賀沼水生生物研究会)
編集支援 相良直己(美しい手賀沼を愛する市民の連合会)
協力/萩原富司
写真提供/
　柄澤保彦、川瀬美幸、熊谷正裕、田島友昭、
　萩原富司、百瀬喬、手賀沼水生生物研究会
　（各写真の著作権は撮影者に帰属します。）

【ご注意】・本著作物は、「改正著作権法第35条第1項（学校その他の教育機関における複製等）」「著作権法第32条1項（引用）」を遵守し、ご利用ください。・授業の目的以外での複製などの行為、もしくは第三者への譲渡はおやめください。

目次のまとめへ（図鑑検索再開）
まえ（参考文献）へ